

# AI時代の現場主義

一般社団法人うめきた未来イノベーション機構  
代表理事・理事長

中石 斉孝



LLM（大規模言語モデル）は既にコモディティ化し、対話型の生成AIから、非公表データと組み合わせるRAG（検索拡張生成）、AIを複数使いこなすAIEージェント、さらにノンコードの自律型マルチAIEージェントが現れて、SaaSに頼らず社内でのAI内製化が容易となりました。今後はデジタルヒューマン、世界モデル、フィジカルAIが順次登場して、最終的にAGI（汎用人工知能）が生まれ、社会の変化が人間の知能を超えるシンギュラリティを迎えるのが定説です。

こうした中で、企業はどうやって競争優位を確保したらいいのでしょうか？

AIの三大要素、アルゴリズム、データ活用、計算資源（GPU）について、アルゴリズムは開発競争に参加するよりも、一番いいものを使いこなすという身のこなしがよさそう、計算資源はインフラであり、投下資本・物量作戦で決まります。

多くの会社は、データでの勝負となりそうです。世の中に眠っているビッグデータの活用は重要ですが、社内に眠るデータの

掘り起こしも急所です。熟練工の秘伝技に加えて、各部で蓄積された成功例と失敗例、修羅場を乗り越えた経験値の多くは暗黙知のままのようです。

AI実装化には暗黙知の形式知化、構造化が重要ですが、むしろ急務の課題とも言えます。昔のようなOJTを通じた継承は難しくなりました。「部下に頼んでも二度手間が発生、無理にやらせて後に指導力不足等と言われるのも嫌なので、自分でやった方が早い、いまだに係長時代と同じことをしている」という声を周りでよく聞きます。

「言われなくても気が付いたこと」に気が付かなくなり、「放っておいてもできたこと」ができなくなり、「起きてはいけないこと」が何度も起こっているとしたら、OJT世代が去りつつあることと無関係ではないのかもしれない。

ここで、ワンオペ状態に悩むシニア層、管理職層にも朗報があります。ChatGPTを始めとして、最新のAIはノンコードで（すなわち文系人間でも）、明確かつ的確なプロンプト（指示）さえだせば、自分がやるのと変わらないか、それ以上の結果を出せるようになります。下手に部下を持つよりは、SKILLSのようなプロンプト虎の巻集と最新版のAIで十分かもしれません。

では、人材育成がいらなくなるのかと言うと、そうでもありません。AIは学習済みか推論可能性が前提であり、学習用データがまだ揃っておらず、推論では対応でき

ない、最新かつ複雑な状況変化に対応できる人、さらに暗黙知を生み続ける人は不可欠です。こういう全てを分かっている人でないと、もつともらしい嘘「ハルシネーション」を見抜くことができません。

もう一つの鍵は、やはりプロンプトです。すると、AIを使いこなせる人と、AIに使われる人の線引きも出てきそうです。では、どこでAIを超える対応能力、情報収集能力、AIを動かす段取り・指導能力は得られるのか——これらは全て、一度現場で修行を積まないと得られないものです。

AIが苦手なものもあります。人間同士の信頼関係の醸成と、人のために身をささげる動機付けです。SF映画でAIロボットが「なぜそこまで、他人のために命を捨てて戦うのか」と言って敗れるシーンがあります。人間が「人の間」であるうちは、この価値を大事にしたいものです。

## 中石 斉孝（なかいし なりたか）

一般社団法人うめきた未来イノベーション機構  
代表理事・理事長

1989年東京大学法学部卒、通商産業省（現経済産業省）に入省。米国ピッツバーグ大学院修士（国際関係）。環境政策、通商交渉、大臣秘書、バイオ産業、技術開発、産業クラスター、自動車産業、ジェットロ・ニューヨークセンター次長、中小企業税制、行政改革、規制改革等、内閣官房で中央省庁再編、東日本大震災復興対策、日本経済再生（アベノミクス成長戦略）を担当。2016年経済産業政策局審議官、18年地域経済活性化支援機構（REVIC）常務、20年ジェットロ・ロンドン事務所長・欧州調整センター長、23年健康・医療戦略推進事務局長・日本医療研究開発機構（AMED）担当室長を歴任、25年から現職。